

女性の「産む意思」に関連する要因の文献検討

A literature review on the factors associated with
'childbearing intention' of women

野崎 由希子*

Yukiko Nozaki

キーワード：妊娠、出産、意思

Key words : pregnancy, birth, intention

要旨

目的：女性の「産む意思」に関連する要因を国内の文献より明らかにする。

方法：検索キーワードを「妊娠」or「出産」and「意思」or「意思決定」とし、医中誌Web、CiNii Articles、JDreamIIIで検索された文献とその引用文献から選んだ37文献を対象にして検討した。文献より産むことの捉えとして記述されている部分や、産むための条件について言及している記述を抽出し、類似性や相違性を検討し分類して整理した。

結果：女性の「産む意思」に関連する要因には、妊娠・出産・育児をどう捉えているかという【妊娠・出産・育児に対する考え】8項目と、生活の中で何を大切にしているかという【ライフスタイル・生活に対する考え】5項目、そして女性の年齢や健康、パートナーとの関係、家庭の経済状況、育児サポートなどの【個人のおかれている状況】9項目があった。

結論：女性が子どもを産むということは、多様な価値観と状況の中での選択であり、「産む意思」をもち、子どもを育てる自信につなげる支援の必要性が示唆された。

* 札幌保健医療大学保健医療学部看護学科 Department of Nursing, School of Health Sciences, Sapporo University of Health Sciences

I. はじめに

厚生労働統計協会（2020）によると、日本の少子化は年々進み、出生数は2016年に初めて100万人を下回り、さらに2019年には、86万234人まで下降して過去最低を記録し、合計特殊出生率は1.36となった¹⁾。この状況は、人口を維持できると考える2.3を大きく下回っており、このような状況が続けば、生産年齢人口の減少から起こる経済的な問題、年金・医療・福祉などの社会保障への影響、さらには、子どもの健全な発育にも影響を与えることが明らかで、大きな社会問題として捉えられている。

リプロダクティブヘルス/ライツでは、希望する子どもの数を希望するときに持つことができ、いつ子どもを産むか、産まないかの選択も女性の権利であることが提唱されている²⁾。この概念の普及からも、女性が主体性をもち子どもを産む選択をすることが、子どもが生まれるか否かに大きく関与していると考えられる。

では、女性はどのようなプロセスを経て産む選択をするのであろうか。女性が「産む意思」をもち出産することを、看護者が支援することは、今日の少子化の改善への一助ともなると考える。よって、今回の研究では、女性の「産む意思」に焦点を当て、関連する要因を明らかにし、女性が主体的に子どもを産む意思決定をするための支援の示唆を得ることを研究目的とする。

II. 研究目的

女性の「産む意思」に関連する要因を国内の文献より明らかにし、女性が主体的に子どもを産む意思決定をするための支援の基礎資料とする。

III. 用語の操作的定義

今回の研究では、「産む意思」を「子ども

をもとうと考えること」と操作的に定義する。

IV. 研究方法

1. 研究対象文献

女性の「産む意思」に関連する要因を明らかにするために、産むことをどう捉えているか、産むことの条件について記述されている国内の文献とした。

2. 文献検索の過程

文献検索は、「妊娠」or「出産」and「意思」or「意思決定」を検索キーワードとし、医中誌Web、CiNii Articles、JDreamⅢを用い、会議録を除外して行った。検索された213件の文献から、産むことをどう捉えているかと、産むことの条件が記載されている文献を選定した。「産む意思」の本質を網羅的に捉えるために、対象とする文献の期間や対象者の限定はしなかった。そのうえで、対象者が外国籍のみの女性の文献を除外し、対象者を日本人女性にしぼった。それらの文献の引用文献の中から、2冊の書籍と18文献を追加した37文献を対象にした。

分析の対象とした37文献より、産むことをどう捉えているかや、産む条件に関連する要因について言及している記述を抽出した。記述されていた内容の中心的な意味を取り出し、コード化し類似性や相違性を検討して分類しカテゴリー化した。また、分析にあたっては、母性看護学の研究者と妥当性を検討した。

V. 結果

1. 年次推移

対象となった37文献の年次推移は、1999年以前4件、2000年から2005年10件、2006年から2010年11件、2011年から2015年9件、2016年以降3件であった。

2. 文献における対象者

文献を研究対象者別にみると、妊娠中または出産を経験した女性を対象とした研究13件、学生や一般女性など妊娠の経験のない対象者に対する研究10件、人工妊娠中絶を受けた女性を対象とした研究5件、若年で妊娠を経験した女性を対象とした研究5件、妊娠先行型結婚を経験した対象者の研究2件、不妊治療を受けた対象者2件であった。

3. 「産む意思」の存在と「産む意思」をもつ時期について

女性が「産む意思」をもつ時期について、文献より以下のようなケースが認められた。

1) 妊娠の前から「産む意思」をもっているケース

これには、不妊治療や計画妊娠のように、産む時期もふまえて「産む意思」を明確にしているケースの他、妊娠する時期を明確に決めていないが、妊娠したら産むと

いう「産む意思」をもち妊娠を受け入れることができているケースがあった。

2) 妊娠の発覚のあとに「産む意思」をもったケース

妊娠先行型結婚といわれるものの中に、妊娠がわかってから「産む意思」を決めるケースが多く認められた。

以上は「産む意思」の存在が認められるケースであるが、すべての出産が「産む意思」を伴うものではなく、妊娠に気がついたときには妊娠週数が22週を過ぎていて明確な「産む意思」を持たないまま出産に至るケースもあった。また、「産む意思」をもたないケースとしては、妊娠の発覚後、産まないことを選択するケースや生涯子どもをもたないことを選択するケースなどがあった。

4. 女性の「産む意思」に関連する要因

対象文献から抽出した女性の「産む意思」

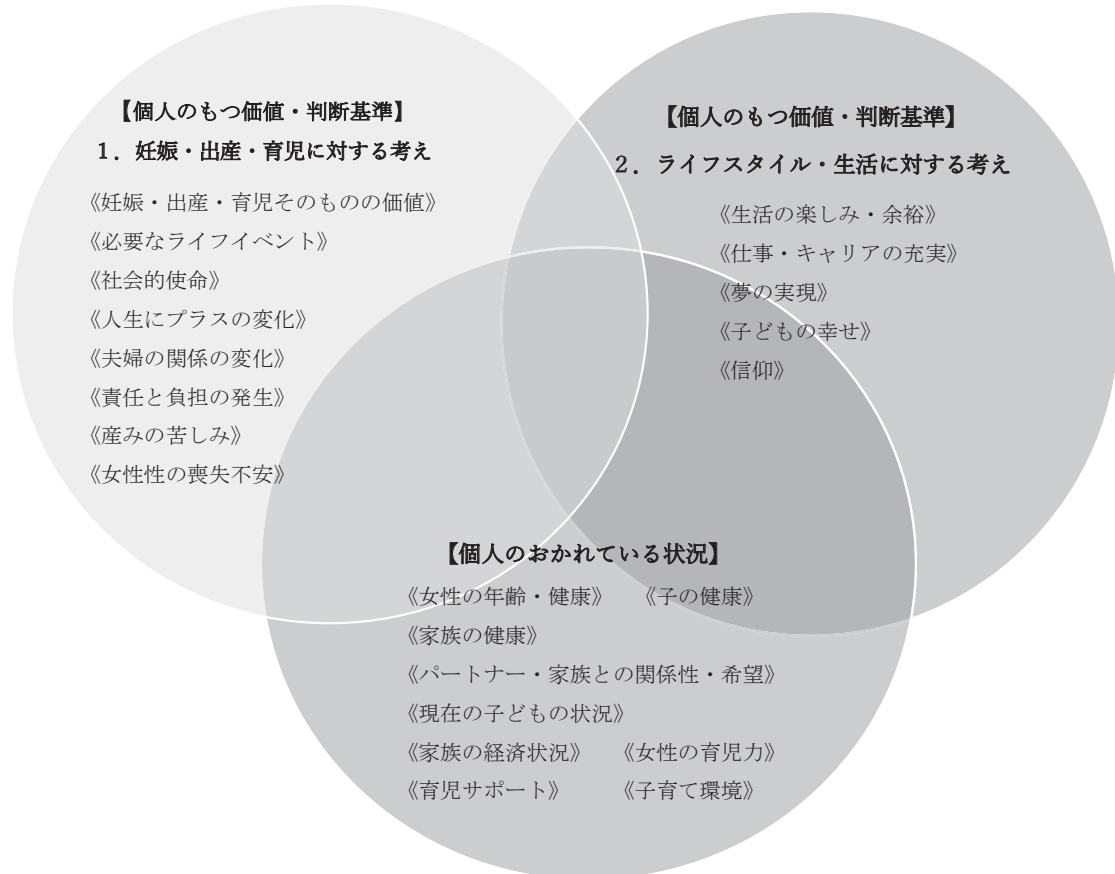


図1 女性の「産む意思」に関連する要因

に関連する要因を図1に示した。抽出した産むことの捉えと、産むことの条件は、【個人のもつ価値・判断基準】と【個人のおかれている状況】に関係するものに分けられた。前者には、【妊娠・出産・育児に対する考え】と、【ライフスタイル・生活に対する考え】の2つがあった。また、【個人のおかれている状況】としては、《女性の年齢・健康》や、《家庭の経済状況》、《育児サポート》などの9項目があげられた。【妊娠・出産・育児に対する考え】、【ライフスタイル・生活に対する考

え】、【個人のおかれている状況】に分け、対象文献から抽出した産むことの捉えと、産むことの条件を、コード化し、サブカテゴリー〈 〉、カテゴリー《 》に分類しその内容を表記した。

1) 妊娠・出産・育児に対する考え

女性の「産む意思」に関連する要因で、妊娠・出産・育児をどのようなものと考えているか、という内容としてまとめられるものを個人のもつ【妊娠・出産・育児に対

表1-1 産む意思に関連する「個人のもつ価値・判断基準」

1. 産む意思に関連する「妊娠・出産・育児に対する考え」		
カテゴリー	サブカテゴリー	コード
《妊娠・出産・育児そのものの価値》	<価値あること>	喜ばしいこと ³⁾ 価値のあること ³⁾⁴⁾⁸⁾ かけがえないこと ⁴⁾ 素晴らしいこと ⁴⁾ 子は天からの授かりもの ⁵⁾⁶⁾ 子どもは宝物 ⁵⁾
	<子は価値あるもの>	人間の命を生み出す偉大で神秘的な営み ⁷⁾ 自分が受けた命をつなぐ ⁴⁾⁸⁾ 新しい命へのつながり ⁵⁾
《必要なライフイベント》	<神秘的・偉大な営み> <命の継承>	結婚すれば子どもがいるのは自然 ⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾ 結婚したら子どもをもつのが普通 ⁷⁾¹²⁾ 結婚したら子どもをもつのが当たり前 ¹³⁾
	<当然のライフイベント>	子孫を残したい ⁴⁾⁷⁾⁸⁾¹³⁾¹⁴⁾ 血のつながった存在が欲しい ⁷⁾¹²⁾¹⁴⁾ 跡継ぎが必要 ¹³⁾ 姓やお墓を継ぐ者が必要 ⁷⁾¹²⁾¹⁴⁾
《社会的使命》	<女性の役割> <次世代育成>	子どもを産み育てるのは、社会に対する女の努め ¹⁵⁾ 次の世代を作ることは、人としてのつとめ ⁷⁾¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾ 次世代の担い手の育成 ⁴⁾⁸⁾
	<人生を豊かにする>	親になることで人生が豊かになる ⁴⁾⁸⁾ 子どもをもつことで、人生の価値を知る ⁷⁾ 苦勞した生い立ちからの早期脱却 ¹⁷⁾ 新しい家庭を築く希望 ¹⁷⁾
《人生にプラスの変化》	<人生の転機となる>	親として成長できる ⁸⁾¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾¹⁶⁾ 子どもは成長するために必要な存在 ¹⁵⁾ 自分を見直す機会 ⁴⁾
	<成長の機会>	守るべきものが生まれて自分自身が強くなる機会 ⁴⁾ 年を取った時に子どもがいなくて寂しい ¹²⁾¹⁴⁾ 子どもは老後の支えになる ¹⁴⁾¹⁵⁾ 子どもは生きたあかしとなる ⁷⁾
《夫婦の関係の変化》 《責任と負担の発生》	<自己の存在のあかし> <夫婦のきずなの深まり>	子どもをもつことで、夫婦のきずなが深まる ¹²⁾¹⁴⁾ 子育ては、経済的な負担がある ⁴⁾
	<経済的負担> <時間的制約>	自由が制限される ⁴⁾⁸⁾ 時間的制約がある ⁴⁾⁸⁾ 育児は体が疲れる ¹⁸⁾ 心身の負担がある ⁴⁾ 心理的負担がある ¹⁹⁾
《産みの苦しみ》	<身体的・心理的負担>	育児が大変 ¹⁵⁾³¹⁾³³⁾ 苦勞が増える ⁷⁾
	<子育てそのものの苦勞>	子どもを育てることへの責任 ⁴⁾²⁰⁾ 子どもの命に対する責任 ⁴⁾²⁰⁾²¹⁾ 子どもを育てる覚悟 ⁴⁾
《産みの苦しみ》	<子どもをもつ責任>	出産時の痛みのイメージ ⁷⁾¹⁵⁾ 出産するのは怖い ⁷⁾
	<出産の苦しみ>	女性としてではなく母親として見られる不安 ⁴⁾ 女性性喪失の不安 ⁴⁾
《女性性の喪失不安》	<女性性の喪失不安>	

する考え】とした。《妊娠・出産・育児そのものの価値》、《必要なライフイベント》、《社会的使命》、《人生にプラスの変化》、《夫婦の関係の変化》、《責任と負担の発生》、《産みの苦しみ》、《女性性の喪失不安》の8つのカテゴリーがあり、表1-1に示した。以下それぞれに関して述べる。

- (1) 《妊娠・出産・育児そのものの価値》としては、妊娠・出産・育児は〈価値あること〉、〈子は価値あるもの〉、〈神秘的・偉大な営み〉、〈命の継承〉という4つのサブカテゴリーがあげられた。妊娠や出産は喜ばしいこと³⁾、価値のあること^{3) 4) 8)}であり、素晴らしいこと⁴⁾と捉えていた。さらに産むことによって得られる子どもに対しても、子は天からの授かりもので宝物^{5) 6)}と考えられていた。また、出産とは、人間の命を産みだす偉大で神秘的な営み⁷⁾であり、自分が受けた命をつなぐ⁴⁾⁸⁾行為であると考えられていた。
- (2) 《必要なライフイベント》としては、〈当然のライフイベント〉、〈子孫を残す〉の2つのサブカテゴリーがあった。結婚すれば

子どもがいるのは自然である⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾という考えや、子孫を残したい⁴⁾⁷⁾⁸⁾¹³⁾¹⁴⁾、姓やお墓を継ぐ者が必要⁷⁾¹²⁾¹⁴⁾という「産む意思」があった。

- (3) 《社会的使命》として、〈女性の役割〉、〈次世代育成〉の2つのサブカテゴリーがあげられた。次の世代を作ることは人としての努め⁷⁾¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾であり、さらに、子どもを産み育てるのは社会に対する女の努め¹⁵⁾であるという考えがあった。
- (4) 《人生にプラスの変化》としては、〈人生を豊かにする〉、〈人生の転機となる〉、〈成長の機会〉、〈老後の安心〉、〈自己の存在のあかし〉の5つのサブカテゴリーがあった。親になることで人生が豊かになる⁴⁾⁸⁾ことがあげられ、子どもをもつことで人生の価値を知る⁷⁾と考えられていた。さらに、育児を通して自分自身が親として成長できる⁸⁾¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾¹⁶⁾と考えられていた。また、妊娠・出産・育児は、〈人生の転機となる〉という考えもあった。この中には、苦労した生い立ちからの早期脱却と新しい家庭を築く希望¹⁷⁾といったものがあった。さらに、年を取った時に子どもがいないと寂し

表1-2 産む意思に関連する「個人のもつ価値・判断基準」

2. 産む意思に関連する「ライフスタイル・生活に対する考え」		
カテゴリー	サブカテゴリー	コード
《生活の楽しみ・余裕》	〈夫婦としての生活の充実〉	夫婦の生活を楽しみたい ⁷⁾¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾²²⁾ 夫婦の時間が必要 ²³⁾
	〈生活を楽しむ〉	やりたいことができなくなる ⁷⁾²⁰⁾²²⁾ 旅行や外食に行きにくくなる ⁷⁾
	〈生活の余裕〉	自分の時間や夫の時間がなくなる ³¹⁾ 自分の生活に区切りがついた ⁷⁾¹²⁾¹⁴⁾
《仕事・キャリアの充実》	〈学業との両立〉	妊娠による退学 ²⁴⁾ 学生生活を送るうえで障害 ²⁵⁾
	〈キャリア継続〉	学業継続との両立困難 ²⁴⁾ 仕事の都合を考えて産まない ¹⁰⁾ 仕事に合わせて産むタイミングを決める ¹⁸⁾²⁷⁾ 妊娠で自分の将来が変わることへの懸念 ²⁵⁾ キャリア中断への未練 ²⁶⁾
《夢の実現》	〈将来の夢〉	将来の夢をあきらめられない ²⁶⁾ 夢をあきらめた ²⁶⁾
《子どもの幸せ》	〈すでにいる子の幸せ〉	出産、育児は夢を断つもの ²⁸⁾ 一人っ子ではかわいそう ²⁹⁾ 何かあった時の助けになる ²⁹⁾ 上の子への影響を考える ²¹⁾
《信仰》	〈信仰〉	すでにいる子を大切に育てたい ¹¹⁾²¹⁾ 生命の誕生は神の意志 ³⁰⁾ 信じている宗教の影響 ³⁰⁾

い¹²⁾¹⁴⁾ といった〈老後の安心〉や、子どもは生きたあかしとなる⁷⁾ と考えられていた。

- (5) 《夫婦の関係の変化》として、子どもをもつことで夫婦のきずなが深まる¹²⁾¹⁴⁾ と考え、夫・妻から父・母への役割の変化がきずなを強めると考えていた。
- (6) 《責任と負担の発生》では、〈経済的負担〉、〈時間的制約〉、〈身体的・心理的負担〉、〈子育てそのものの苦労〉、〈子どもをもつ責任〉の5つのサブカテゴリーがあげられた。子育ては経済的な負担がある⁴⁾ と考えられ、自由が制限される⁴⁾⁸⁾、育児は体が疲れる¹⁸⁾ 心身の負担がある⁴⁾ ということがあげられた。また育児が大変¹⁵⁾³¹⁾³³⁾ という〈子育てそのものの苦労〉もあげられた。また、子どもの命に対する責任⁴⁾²⁰⁾²¹⁾ をあげ、子どもを育てる覚悟⁴⁾ が必要であると考えられていた。
- (7) 《産みの苦しみ》としては、出産時の痛みのイメージ⁷⁾¹⁵⁾ や、出産するのは怖い⁷⁾ という、出産時の苦痛を懸念する内容があった。
- (8) 《女性性喪失の不安》として、出産することによって、女性としてではなく母親としてみられる不安⁴⁾ があげられていた。

2) ライフスタイル・生活に対する考え

「産む意思」には、生活の中で何に価値を置き大切にしているかという【ライフスタイル・生活に対する考え】も関連していた。それらには、《生活の楽しみ・余裕》、《仕事・キャリアの充実》、《夢の実現》、《子どもの幸せ》、《信仰》の5つのカテゴリーがあり、表1-2に示した。以下それぞれについて述べる。

- (1) 《生活の楽しみ・余裕》として、〈夫婦としての生活の充実〉、〈生活を楽しむ〉、〈生活の余裕〉という3つのサブカテゴリーがあげられた。夫婦の生活を楽しみたい⁷⁾¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾²²⁾、夫婦の時間が必要²³⁾ ということ

や、子どもができるとやりたいことができなくなる⁷⁾²⁰⁾²²⁾ という考えがあった。自分の生活に区切りがついた⁷⁾¹²⁾¹⁴⁾ と考えられる場合は、「産む意思」につながっていた。

- (2) 《仕事・キャリアの充実》として、〈学業との両立〉、〈キャリア継続〉、という2つのサブカテゴリーがあげられた。学生の場合、妊娠による退学²⁴⁾ や、学生生活を送るうえで障害²⁵⁾ となり学業継続との両立困難²⁴⁾、があげられ、「産む意思」をもつことは学業をあきらめることにつながっていた。また、就業女性の場合、妊娠で自分の将来が変わることへの懸念²⁵⁾ やキャリア中断への未練²⁶⁾ という考えや、仕事の都合を考えて産まない¹⁰⁾ 仕事に合わせて産むタイミングを決める¹⁸⁾²⁷⁾ ということが「産む意思」に影響していた。
- (3) 《夢の実現》として、〈将来の夢〉というサブカテゴリーがあげられた。出産・育児は夢を断つもの²⁸⁾ であり、将来の夢をあきらめきれない²⁶⁾ という考えがあった。夢の実現に対する強い意志がある場合、それが優先され「産む意思」に影響していた。
- (4) 《子どもの幸せ》として、〈すでにいる子の幸せ〉というサブカテゴリーがあった。一人っ子ではかわいそう、何かあった時の助けになる²⁹⁾ という理由から産む選択をする一方、すでにいる子を大切に育てるために産まない選択をしていた。
- (5) 《信仰》では、生命の誕生は神の意志³⁰⁾ であることや、信じている宗教の影響³⁰⁾ が「産む意思」に影響していることが考えられた。

3) 個人のおかれている状況

女性が子どもを「産む意思」に関連する【個人のおかれている状況】があった。対象文献から抽出した【個人のおかれている状況】には、以下の9つのカテゴリーがあった。表2に示した。

- (1) 《女性の年齢・健康》のカテゴリーには、
 〈女性の年齢〉、〈女性の健康〉、〈妊娠・出産の異常のリスク〉という3つのサブカテゴリーがあった。高齢出産忌避¹¹⁾¹⁸⁾²¹⁾²⁹⁾や、若さ²⁴⁾³¹⁾³²⁾も要因としてあげられた。さらに、自己の健康を加味した家族計画¹⁶⁾

表2 産む意思に関連する「個人のおかれている状況」

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
《女性の年齢・健康》	〈女性の年齢〉	高齢出産忌避 ¹¹⁾¹⁸⁾²¹⁾²⁹⁾ 現在の妻の年齢 ²⁷⁾³¹⁾ 若さ ²⁴⁾³¹⁾³²⁾
	〈女性の健康〉	女性の健康 ²³⁾³³⁾³⁷⁾ 自己の健康を加味した家族計画 ¹⁶⁾
	〈妊娠・出産の異常のリスク〉	妊娠継続のリスクを心配 ²⁷⁾
《子の健康》	〈胎児の健康への不安〉	流産、早産のリスクの存在 ¹⁰⁾²⁹⁾ 子の異常のリスクへの不安 ³¹⁾³³⁾ 薬の副作用とX線撮影の影響への懸念 ²¹⁾
《家族の健康》	〈出生後の障害への不安〉	発達障害への不安 ²⁹⁾
	〈夫・パートナーの健康〉	夫の健康 ²²⁾²³⁾
	〈すでにいる子どもの健康〉	健康に育つ子どもの存在 ²⁹⁾
《パートナー・家族との関係性・希望》	〈婚姻の問題〉	未婚である ³³⁾ 結婚する気がない ²²⁾ 別れた後の妊娠 ³⁴⁾
	〈夫・パートナーとの関係性〉	幸せで安定した関係 ⁴⁾¹²⁾¹⁴⁾²³⁾³⁷⁾ 夫婦が助け合う ²³⁾
	〈夫・パートナーの希望〉	夫・パートナーの希望 ⁷⁾¹³⁾²⁷⁾³⁴⁾ 夫・パートナーの承認・同意 ⁹⁾¹⁷⁾³³⁾³⁵⁾⁴²⁾ 夫の反対・無理解 ²¹⁾²⁶⁾
《現在の子どもの状況》	〈親・家族の反応〉	親が楽しみにしていた ¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾ 親・家族の受け入れ ¹⁷⁾³⁵⁾ 両親の反対 ²¹⁾²⁶⁾
	〈子どもの存在〉	すでにいる子どもの存在 ³²⁾³⁶⁾
	〈子の性別に対する希望〉	男(女)の子が欲しい ²⁷⁾²⁹⁾ 男児と女児を出産できた ²⁹⁾
《家庭の経済状況》	〈欲しい子どもの数〉	子ども数に満足 ²⁹⁾³⁴⁾ 2人と決めていた ³³⁾
	〈子育ての費用〉	教育費がかかる ⁷⁾¹¹⁾¹⁵⁾¹⁸⁾¹⁹⁾²³⁾³¹⁾ 養育費がかかる ¹¹⁾¹⁹⁾³¹⁾ 保育料の負担 ²³⁾
	〈妊娠出産にかかる費用〉 〈現在の経済状況〉	妊娠出産にかかる費用 ¹⁹⁾²³⁾²⁹⁾ 経済的なゆとり ¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾ 経済的問題のなさ ⁴³⁾ 経済的に困難な状況 ²⁰⁾²¹⁾²⁵⁾³²⁾³³⁾ 夫の収入の減少 ³²⁾ 夫の収入のみで生活が可能 ²⁸⁾ 夫の収入のみでは不安定 ²⁸⁾
《女性の育児力》	〈将来的な収入〉	夫婦の定年までに子どもが成人する ²²⁾³³⁾³⁷⁾
	〈育児の大変さ〉	上の子の育児で精いっぱい ¹⁰⁾ 親になる自信がない ²⁰⁾²⁶⁾
	〈親になる能力〉	親になる能力がない ²⁰⁾²⁶⁾
《育児サポート》	〈夫のサポート〉	虐待してしまうのがこわい ²²⁾ 夫の育児協力がある ²³⁾³⁷⁾ 夫の協力が得られない ¹⁸⁾²²⁾³¹⁾
	〈家族のサポート〉	家族の育児協力がある ²³⁾
	〈地域の社会資源〉	良い保育園の存在 ⁷⁾¹²⁾¹⁴⁾¹⁹⁾²²⁾³¹⁾ 保育時間の問題 ¹¹⁾
《子育て環境》	〈住居環境〉	住居が狭い ¹¹⁾¹⁸⁾²²⁾³¹⁾
	〈居住地の環境〉	住宅事情による問題(駐車スペース) ⁷⁾ 子育てに適した環境 ²²⁾ 公園の未整備 ¹⁸⁾

- を考え、流産・早産のリスクの存在¹⁰⁾²⁹⁾ や、妊娠継続のリスクを心配²⁷⁾ し、次子の出産を検討していた。
- (2) 《子の健康》では、〈胎児の健康への不安〉として考える子の異常のリスクへの不安³¹⁾³³⁾ や、〈出産後の障害への不安〉として発達障害への不安²⁹⁾ を考え、産む決心がつかなかったという2つのサブカテゴリーがあった。そこには、子の健康を考えた産む選択があった。
- (3) 《家族の健康》では、〈夫・パートナーの健康〉、〈すでにいる子どもの健康〉という2つのサブカテゴリーがあった。夫の健康²²⁾²³⁾ や健康に育つ子どもの存在²⁹⁾ が次子をもとうとする意思に影響を及ぼしていた。
- (4) 《パートナー・家族との関係性・希望》には、〈婚姻の問題〉、〈夫・パートナーとの関係性〉、〈夫・パートナーの希望〉、〈親・家族の反応〉という4つのサブカテゴリーがあった。未婚である³³⁾ ことや結婚する気がない²²⁾ という〈婚姻の問題〉は出産を諦めることにつながっていた。反対に幸せで安定した関係⁴⁾¹²⁾¹⁴⁾²³⁾³⁷⁾ で夫婦が助け合う²³⁾ 場合は、「産む意思」にプラスに働いていた。さらに、子どもをもつことが、夫・パートナーの希望⁷⁾¹³⁾²⁷⁾³⁴⁾ であり、親が楽しみにしていた¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾ というこども、産む選択につながっていた。
- (5) 《現在の子どもの状況》には、〈子どもの存在〉、〈子の性別に対する希望〉、〈欲しい子どもの数〉という3つのサブカテゴリーがあった。その中では、すでにいる子どもの存在³²⁾³⁶⁾ や、男(女)の子が欲しい²⁷⁾²⁹⁾ という考えや、子ども数に満足²⁹⁾³⁴⁾ したために、これ以上子どもをもたない選択をすることもあった。
- (6) 《家庭の経済状況》には、〈子育ての費用〉、〈妊娠出産にかかる費用〉〈現在の経済状況〉、〈将来的な収入〉という4つのサブカテゴリーがあった。将来の教育費がかかる⁷⁾¹¹⁾¹⁵⁾¹⁸⁾¹⁹⁾²³⁾³¹⁾ や、経済的に困難な状況²⁰⁾²¹⁾²⁵⁾³²⁾³³⁾ に加え、夫婦の定年までに子どもが成人する²²⁾³³⁾³⁷⁾ ように考えて産む選択をすることがあげられていた。
- (7) 《女性の育児力》には、〈育児の大変さ〉、〈親になる能力〉という2つのサブカテゴリーがあった。上の子の育児で精いっぱい¹⁰⁾ で、親になる能力がない²⁰⁾²⁶⁾ と考え、虐待してしまうのがこわい²²⁾ と考えていた。
- (8) 《育児サポート》には、〈夫のサポート〉、〈家族のサポート〉、〈地域の社会資源〉の3つのサブカテゴリーがあった。夫の育児協力²³⁾³⁷⁾ は「産む意思」に肯定的に働き、さらに、良い保育園の存在⁷⁾¹²⁾¹⁴⁾¹⁹⁾²²⁾³¹⁾ や、保育時間の問題¹¹⁾ がないことも影響を及ぼしていた。一方で夫の協力を得られない¹⁸⁾²²⁾³¹⁾ ことが、次子を持たない理由としてあげられていた。
- (9) 《子育て環境》には、〈住居環境〉、〈居住地の環境〉の2つのサブカテゴリーがあげられた。住居が狭い¹¹⁾¹⁸⁾²²⁾³¹⁾ ことや公園の未整備¹⁸⁾ があげられた。

VI. 考察

1. 【妊娠・出産・育児に対する考え】の影響

女性の「産む意思」に関連する要因を検討した結果、まず【妊娠・出産・育児に対する考え】の影響があげられた。女性は、妊娠・出産・育児に加え、子どもの存在そのものを喜ばしい価値のあるもの、かけがえのない素晴らしいものと捉え、《妊娠・出産・育児そのものの価値》を認める考えがあった。杵淵は、一般社会において、妊娠や出産は喜ばしい価値のある出来事として認知されており、多くの女性たちもそのような社会の価値観の中で生活していると述べている³⁾。このようなことから、「子どもをもとうと考える」ことは、時代が変化しても現代の女性の中に変わらず存在していることが推察された。ま

たそれは、人生にとってあたりまえで、《必要なライフイベント》という考えにもつながっている。加えて子を産み育てることは次世代を育てることであり、《社会的使命》という捉えもあった。

こうした観念的捉えの他に、子どもをもつことでもたらされる実質的な捉えもあった。子どもをもつことは、〈成長の機会〉となり、〈人生を豊かにする〉という考えが存在する。これらの考えは、個人の生育歴や家族背景、地域社会の価値観が影響していることがうかがえた。ある地域では、家族がたくさんいることが、楽しく豊かなこととされており、こうした地域性が存在していた。

実質的な影響としては、マイナス面もあげられた。《責任と負担の発生》や、《産みの苦しみ》、《女性性の喪失不安》である。《責任と負担の発生》では、〈時間的制約〉、〈経済的負担〉、〈身体的・心理的負担〉、〈子育てそのものの苦勞〉、〈子どもをもつ責任〉があり子育ては経済的にも負担がかかり、自由な時間がなくなり、体力が必要で、苦勞を伴うものという認識がもたれているといえる。

2. 【ライフスタイル・生活に対する考え】の影響

生活の中で何を大切にしているかという【ライフスタイル・生活に対する考え】も「産む意思」に影響していた。子どもをもつことは尊く価値のあるものだとして認識していても、自分が大切にしている《生活の楽しみ・余裕》や、《仕事・キャリアの充実》、《夢の実現》が子どもをもつことでどのように影響され変わるのかを考えて「産む意思」を決定していると考えられた。子どもを産む前に夫婦で楽しむ時間を持ちたいという考えや、やりたいことや自分の時間を優先したいという考えの存在は、「女性が『母として』『妻として』よりも『個人として』生きたい。女性＝母親・妻では、もはや幸福な一生とはならなくなったことを直視しないわけにはいかなくなっ

た」という柏木の考え¹²⁾を裏付ける内容であるといえる。

また近年の女性の社会進出と高学歴化にもなった《仕事・キャリアの充実》、《夢の実現》という価値の影響の大きさをうかがわせる。従来女性の年齢別就労状況は、M字を描くといわれてきた。結婚、あるいは出産を機に退職し、子どもが小さな頃は仕事を控え、子育てに手がかからなくなった頃に再び就労するためである。しかし現代は、この傾向が少なくなり、子どもを産んでも就労を続けるケースが増えてきている。そういう中で、仕事内容、責任、キャリアへの影響や仕事と子育ての両立が可能かを考え、タイミングを検討し、折り合いをつけ「産む意思」をもつ状況が考えられた。また、学生時期の妊娠も学業との両立が可能か、両立が難しい場合は将来の《仕事・キャリアの充実》、《夢の実現》との関係で、何を優先するかで「産む意思」が決まっていく。

一方、《子どもの幸せ》を優先する考えでは、すでにいる子を大切にしたいという考えが、「産む意思」に関連する要因としてあげられた。

3. 【個人のおかれている状況】の影響

「産む意思」には個人のもつ思考や価値観というものの他、実際に産むことを考える上で検討・考慮される個人のおかれている状況が大きく関わっている。

まず、《女性の年齢・健康》、《子の健康》が関連する要因としてあげられる。現在の妻の年齢によって、高齢出産忌避という考えや、妻が高齢であるからこその健康への心配、胎児の異常のリスクも「産む意思」に影響する。野口は、高齢出産の影響として、40歳以上では帝王切開率の上昇や分娩時出血量の増加、染色体異常・胎児奇形の増加、12週以降の流産・子宮内胎児死亡の増加が認められたと報告している³⁸⁾。また、高齢だけではなく、若さというのも周囲の産むこ

とへの理解や本人の育児力との兼ね合いで、「産む意思」に影響していた。

《パートナー・家族との関係性・希望》では、未婚で育てられないことや結婚する気がないなどの婚姻に関連する要因や、妊娠・出産に対するパートナーや家族の承認・同意、理解があげられた。婚姻より妊娠が先行した場合、パートナーの妊娠の受け入れそのものが女性の「産む意思」を支えることにつながり婚姻に向かう意思へとつながっていくことが考えられた。一方、未婚・既婚に限らず、パートナーや夫の受け入れがない場合は、「産む意思」をもつことは困難とみられた。パートナーとの関係性がよい場合は、「産む意思」をもつことを促進した。信頼関係、協力関係がありパートナーとの関係が円満でよくコミュニケーションがとれていることは、後述する育児のサポートにも良い影響があると考えられる。それは実際の育児を助けてもらうという実質的なサポートの他、精神的サポートも期待できる。他には、親が楽しみにしていたという要素も「産む意思」をもつことを促進した。周囲の承認や祝福は、「産む意思」への力になると考えられた。

《家庭の経済状況》では、経済的なゆとりや収入の安定が「産む意思」に影響していた。それは現時点での状況だけではなく、長期的展望ももって考えられ、経済的に困難であることや、夫の収入の変化、子育て費用（教育費・養育費・妊娠・出産費用）の負担が、「産む意思」にマイナスに働いた。特に、高学歴社会の中、子どもの教育に必要とされる経費は増加しており、複数の子どもを社会人になるまでの間、経済的に支えていけるのだろうか、というのが子どもを育てる上での現実的な問題となっている。

育児に関しては、《育児サポート》、《女性の育児力》があげられた。《育児サポート》では、夫の育児協力、家族の育児協力や、保育園があること、さらに保育時間の問題があげられていた。核家族化が進んだ現代では、

夫の育児協力への期待は大きい。また、就労女性にとって保育園の存在は、「産む意思」をもつ上で重要である。加えて、保育時間と仕事の時間が合わなければ、そこを補う何らかのサポートを必要とする。

《女性の育児力》では、上の子の育児で精いっぱいということや、親になる自信や能力がなく育てられないことがあげられた。少子化の中で大人になるまで他の子どもの成長などをみる経験が著しく減少し、また、核家族化や地域の連携の弱体化は、家庭内や地域での育児力を低下させてきた。この指摘は新しいものではないが、今日の育児が大変で苦勞が多いという認識とこの子育ての自信のなさは無関係ではないと考える。

4. 女性の「産む意思」の決定過程

今回の研究では、「産む意思」に関連する【妊娠・出産・育児に対する考え】、【ライフスタイル・生活に対する考え】、【個人のおかれている状況】の力動的関係や影響の大きさは明らかにできないが、それぞれが関連し合っ「産む意思」の決定につながっていると考えられる。すなわち、女性はそれぞれが、妊娠・出産・子育てに関する何らかの考えをもち、実際の選択の場面では、生活の中で大切にしているものが妊娠・出産でうける影響を考え、さらにそこに個人の置かれている状況が加味されて現実的な判断をしていると推察された。そこで何が重要となるのかについては、個々人で違っていると考える。また、人によっては全く影響を受けない要素もあるだろう。しかし、多くのケースで個々の抱える【妊娠・出産・育児に対する考え】、【ライフスタイル・生活に対する考え】、【個人のおかれている状況】をすり合わせ、産むことを決めていると推測された。

5. 「産む意思」をもつための支援

では、こうした「産む意思」を支援するためにはどうしたらいいのだろうか。ひとつに

は、【妊娠・出産・育児に対する考え】、【ライフスタイル・生活に対する考え】、【個人のおかれている状況】の中で、「産む意思」をもつ上でマイナスに働くものの改善があげられる。では、いくつかあるマイナスの要素のうち何が重要となるのだろうか。いくつかの文献で、女性が理想とする子どもの数より、実際の産む数の方が少ないことが明らかにされている³⁹⁾⁴⁰⁾⁴¹⁾。それらの文献からは、「育児の負担やストレス・不安、サポート不足」³⁹⁾⁴⁰⁾⁴¹⁾、「経済的問題」³⁹⁾⁴⁰⁾、「仕事の両立」⁴⁰⁾、「年齢や健康」³⁹⁾という要素が導き出されている。家族が欲しいと考える子どもの数が得られる社会になることが望ましい。看護師はの中で、育児に関する部分と健康に関する支援で、社会の期待に応えることができるのではないだろうか。育児が大変で負担が大きいという認識は、実際の子育て世代の声として発せられており、子どもをもつ前の女性の【妊娠・出産・育児に対する考え】にも影響するものである。本人の「育児力」を高め、また周囲のサポートが受けられるような支援によって子育てに自信がもてるようにすることに加え、健康的な生活を送り適切な時期に「産む意思」をもてるような支援が必要と考える。

6. 研究の限界と課題

本研究は女性の「産む意思」に関連する要因を検討する目的であり、使用したデータベースの特性により、公表されたすべての文献を検索できていないことが考えられる。本研究では、「産む意思」に関連する要因について検討したが、「産む意思」をもつプロセスや、各要因の力動的関係を明らかにすることが今後の課題である。

VII. 結論

1. 女性の「産む意思」に関連する要因は、妊娠・出産・育児をどう捉えているかとい

う【妊娠・出産・育児に対する考え】と、生活の中で何を大切にしているかという【ライフスタイル・生活に対する考え】、そして女性の年齢や健康などの【個人のおかれている状況】があった。

2. 女性は、【妊娠・出産・育児に対する考え】の中で《妊娠・出産・育児そのものの価値》や《社会的使命》を感じ、自分にとって《必要なライフイベント》であることや、《人生にプラスの変化》をもたらす一方、《責任と負担の発生》や《産みの苦しみ》があると捉えていた。
3. 【ライフスタイル・生活に対する考え】では、《生活の楽しみ・余裕》、《仕事・キャリアの充実》、《夢の実現》を大切に、さらに、《子どもの幸せ》が「産む意思」をもつことに影響していた。
4. 【個人のおかれている状況】として《女性の年齢・健康》や《家庭の経済状況》をふまえた上で、《現在の子ども状況》、《育児サポート》が「産む意思」に影響していた。
5. 女性は子どもをもつことを【妊娠・出産・育児に対する考え】、【ライフスタイル・生活に対する考え】、【個人のおかれている状況】をすり合わせ、現実の中で産むことを決めていると推測された。
6. 「産む意思」をもつための支援として、〈女性の育児力〉を高め周囲の〈育児サポート〉が得られ、育児の自信につながる支援が必要であると考えられる。今後は、個人が健康を維持し、適切な時期に「産む意思」をもてるような具体的な支援を明らかにする必要がある。

謝辞

本研究にあたり、研究の全プロセスにわたってご指導・ご助言をいただきました札幌保健医療大学保健医療学部看護学科、母性看護領域教授齋藤早香枝先生に心より感謝申し上げます。

文献

- 1) 小田清一, 井上康平, 榎原崇広, 他. 国民衛生の動向・厚生指標 増刊. 一般社団法人厚生労働統計協会, 2020, 472p.
- 2) 森恵美, 高橋真理, 工藤美子, 他. “母性看護の基盤となる概念”母性看護学概論. 第13版, 医学書院, 2020, pp. 2-52.
- 3) 杵淵恵美子. 人工妊娠中絶の意思決定過程において女性が体験するアンビバレンス—バランスシートの作成による検討—. 日本女性心身医学会誌. 2006, 11(3), 224-233.
- 4) 服部律子. 大学生の親になることに対する意識. 思春期学. 2008, 26(2), 261-267.
- 5) 田口朝子. 妊娠葛藤の質的構造—妊娠から出産に至るまでの女性たちの悩みの声. 生命倫理. 2012, 22(1), 14-25.
- 6) 五十嵐世津子, 森圭子. 看護学生と女性大学生の結婚と出産, 不妊に対する意識. 弘前大学医学部保健学科紀要. 2006, 5, 15-21.
- 7) 塩沢薫子. 青年期女子の「子どもを産みたい」理由と「子どもを産みたくない」理由について—女性性受容、平等主義的性役割態度、個人としての自己実現との関連—. 臨床発達心理学研究. 2011, 10, 40-57.
- 8) 服部律子. 親準備性尺度作成のための因子抽出の試み. 思春期学. 2008, 26(4), 428-433.
- 9) 大日向雅美. 母性の研究その形成と変容の過程：伝統的母性観への反証. 川島書店, 1988, 330p.
- 10) 平松紀代子. 出産の意思決定を規定する要因について—きょうだいの年齢差に着目して. 研究紀要. 2009, 38, 102-112.
- 11) 平松紀代子. 理想子ども数を産まない意思決定に関わる要因に関する質的研究—時間的拘束と出生タイミングに着目して—. 家族関係学. 2003, 22, 59-69.
- 12) 柏木恵子. 子どもという価値—少子化時代の女性の心理. 中公新書, 2001, 236p.
- 13) 岡田啓子. 不妊治療を行う人々にとっての子どもを産む意味. 田園調布学園大学紀要. 2015, 10, 235-247.
- 14) 柏木恵子, 永久ひさ子. 女性における子どもの価値—今、なぜ、子を産むか—. 教育心理学研究. 1999, 47, 170-179.
- 15) 竹原健二, 三砂ちづる. 若者の結婚や子供に対する価値観と少子化への考察—沖縄と関東における質的研究より—. 思春期学. 2006, 24(4), 590-600.
- 16) 坂上明子. 不妊治療による妊娠・出産後の意思決定過程. 日本生殖看護学会誌. 2009, 6(1), 17-25.
- 17) 小川久貴子, 安達久美子, 恵美須文江. 10代女性が妊娠を継続するに至った体験. 日本助産学会誌. 2007, 21(1), 17-29.
- 18) 平松紀代子. 出生時数抑制への動機に関する一研究—出生停止理由と、出生タイミング規定要因からの考察—. 家政学研究. 2001, 10-16.
- 19) 奥野雅子, 宮木ゆか, 中塚幹也. 就労妊婦の社会環境と子どもをもつことへの意識—第1報：妊婦の就労と官民格差、夫の育児休業—. 母性衛生. 2008, 49(2), 245-252.
- 20) 山口孝子(久野), 小笠原昭彦, 堀田法子. 大学生の避妊に対する態度と行動のずれに関する検討. 小児保健研究. 2007, 6(1), 83-91.
- 21) 杵淵恵美子, 新井陽子, 高橋真理. 人工妊娠中絶を受ける女性の心理—自由記述の分析から—. 神奈川県立保健福祉大学誌. 2014, 11(1), 41-49.
- 22) 森脇智秋. 地方都市に移住する成人期独身者の結婚観と子ども観. インターナショナルNursing Care Research. 2018, 17(4), 71-80.
- 23) 儀間継子, 仲村美津枝, 伊敷和枝, 他. 沖縄県の女子大生の少子化対策としての意識. 母性衛生. 2005, 46(2), 320-324.

- 24) 町浦美智子. 社会的な視点から見た十代妊娠—十代妊婦への面接調査から. 母性衛生. 2000, 41(1), 24-31.
- 25) 林桐代, 町浦美智子, 佐保美奈子. 大学生の性行動およびライフスキルの実態. 大阪府立大学看護学部紀要. 2012, 18(1), 45-55.
- 26) 水田結菜, 千場直美. 若年母親における妊娠期の困難と対処. 兵庫県母性衛生学会雑誌. 2018, 27, 44-52.
- 27) 平松紀代子. 妊娠順位別の出産意図の変化から探る出生時数規定要因について. 家族社会学研究. 2003, 15(1), 27-36.
- 28) 近藤(有田) 恵, 稲本俊. 医療職を目指す学生の生殖を巡る選択の枠組み. 生命倫理, 2016, 26(1), 115-123.
- 29) 横尾京子, 田中都代子, 時安真智子. 超未熟児を出産した母親における次子妊娠・出産の意思決定と援助. 母性衛生. 1995, 36(2), 298-304.
- 30) 高橋健太郎, 栗岡裕子, 尾崎智哉, 他. 宗教上の理由により人工妊娠中絶を行えない10代妊娠への対応について. 思春期学. 1998, 16(1), 19-24.
- 31) 宮岡久子. 夫婦の持つ子ども数に関連する要因の検討. 母性衛生. 2000, 41(4), 473-482.
- 32) 曾我部美恵子, 大井恵子, 岸恵美子, 他. 人工妊娠中絶を決定するまでの経緯と心理変化. 日本女性心身医学雑誌. 2000, 5(2), 190-196.
- 33) 柘淵恵美子, 高橋真理. 女性たちの人工妊娠中絶における意思決定過程. 日本母性看護学会誌. 2004, 14(1), 7-16.
- 34) 平松紀代子. 出産の意思決定にともなう葛藤. 人間文化研究科年報. 2001, 17, 225-234.
- 35) 跡上富美. 妊娠先行婚女性の家族形成過程の特徴. 東北大医保健学科紀要. 2011, 20.
- 36) 吉田佳代, 前田ひとみ. 望まない妊娠の予防対策に関する研究—A県における人工妊娠中絶経験者の面接調査から—. 母性衛生. 2014, 54(4), 604-611.
- 37) 山内弘子, 高間静子, 上野栄一. 出産した子ども数の決定要因—50代の夫婦—. 日本看護学会論文集 母性看護. 2012, 96-99.
- 38) 野口聡一, 菊井敬子, 中田高公. 当院における40歳以上の妊婦の検討. 現代産婦科. 2013, 62(1), 29-33.
- 39) 国立社会保障・人口問題研究所. “現代日本の結婚と出産—第15回出生動向基本調査(独身者調査並びに夫婦調査)報告書—. http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/report15html/NFS15R_mokuji.html, (2020, 11, 29) .
- 40) 鈴木沙江子, 和田由美子. 母親の理想子ども数と予定子ども数に影響を及ぼす要因. 健康科学大学紀要. 2010, 6(1), 93-103.
- 41) 久保秀一, 羽田明. 理想子ども数0人に関する母子環境の要因の解析—母親にとって理想子ども数0人の意味するもの—. 小児保健研究. 2007, 66(6), 832-839.
- 42) 藤村博恵, 峯馨, 畠中佳織, 他. 妊娠先行型結婚で出産を経験した学生の妊娠期の心理・社会的特徴. 母性衛生. 2008, 48(4), 428-436.
- 43) 大塚亜沙子, 岡村純. 10代妊婦が妊娠を継続するプロセス：心理的側面と社会的対処に着目して. 日本赤十字九州看護大学紀要. 2014, 13, 3-17.

